淑徳短期大学研究紀要第45号（2006.2）

地域における子育て支援体制の一考察
～調査から見えてきたもの～

塩　野　敬　祐

（2005年10月31日受理）

要　約

地域福祉において住民主体原則が言われる。子育て支援に関しても例外ではない。しかし、専門家ではない住民がどのようにしてその主体性を身につけるのだろうか。板橋区前野町の住民は、自発的に子育て支援のための学びを始めた。2年連続して子育てや子どもの生活実態調査を行った。そればかりか、シンポジウム、子どもと大人の対話集会などを開催して、地域住民を自ら啓蒙している。つまり、調査結果ばかりか、そうした住民の学びと地域参画の実践が、真の「子育て支援ネットワーク」のあるべき姿を見せてくれた。その運動に参与したものとして、ここに、その報告をしたい。さらに、青少年問題協議会委員会において青少年の地域参画の検討をした内容も併せて考察して提言することとする。

キーワード　家族機能の社会化、地域解体、子育て支援ネットワーク、地域参画、まちづくり

1．研究に対する問題意識

少子高齢化の流れの中で、子どもたちの健全育成というのは家族集団や地域集団の存続にかかわる重大事項である。つまり、家庭では三世代同居が減少し、地域では共同体が解体している今日、世代間のコミュニケーションは乏しくなり意識ギャップが広がりつつある。また、生活機能全般で社会化（外部化）が進んでおり、家庭や地域の教育力は低下し、子どもたちは、家庭や地域社会を不要と見るようになりかねない。

一方、地域福祉が社会福祉において主流となり、住民、NPO，ボランティアなどがその推進者として、社会福祉法に規定される時代である。今後の生活保障は、行政にばかり頼ることはできず、住民が主体的に社会参加しなければならない。こうした時代にあって、子どもが地域との接点を断った生活をするならば、将来の社会福祉・生活保障は破綻するに違いない。

小職の在職する短大の所在地である東京都板橋区前野町の地域住民は、そうした問題意識を共有し、子育てや子育ちの実態を明らかにしつつ、今後の青少年健全育成の

方向性を検討しつつある。その過去３年間の歩みを振り返りつつ、新たな全区的調査の結果を踏まえながら、今後、地域で行うべき子育て・子育ち支援のあり方を明らかにしたい。

２．これまでの研究経過

（１） 住民の主体形成のための調査活動の歩み

板橋区前野町の町民が、「明日の板橋“まち”づくりの学び」という団体を立ち上げ、最初の事業として、『子育ち・子育て環境調査』を行う事になった。筆者も誘われそのための実行委員会に加わることとなった。

前野町という一定地域を調査するにあたって、その目的を住民の主体形成におき、その方法として、自分たちがかかわっている子どもたち、あるいは、その保護者を自ら調査するというという方針で行うこととなった。調査委員会のスタッフは、地元小学校・中学校のPTA役員であったり、町会役員であったり、町会少年野球の監督・コーチであった。

第１回目の調査テーマは、「子育ち、子育て環境と自分史」（2002年８月）である。つまり、地域の子どもたちはどのように育てられどのように育っているのか。あるいは、自分たちは子ども時代にどのように育てられてきたのか。そうしたことを明らかにすることによって、住民たちが、主体的にこれからの健全な青少年育成のあり方を考え、実践の糸口を見出す機会とすることに狙いを置いた。そのため、調査活動に先立ち、近隣の学校の小中学校の校長、保育所保育士、健康福祉センター保健師、児童館館長等をパネルにした、パネルディスカッションを実施した。

その調査の後には、その集計結果をもとに、地域リーダー研修としてワークショップを実施した（2002年９月）。

第２回目の調査は、「子育て調査」（2004年３月）として、18歳までの子どもを育てている保護者を対象として、調査テーマを「子育て」に限定した。

その調査の実施後は、第１回目と同様なパネルディスカッションを行った。しかし、その際に、スタッフのＰＴＡ会長が集計結果をもとにして書いたシナリオを、近隣中学の演劇部がそれを演じるというプログラムを用意することで、参加した地域住民に親子関係の実態をリアルに伝えることができた。

2

（２） 板橋区青少年問題協議会で実施した調査

平成15年板橋区青少年問題協議会の諮問テーマは、「子どもたちの主体的な地域参画の推進～青少年の手によるまちづくりの可能性を探る～」であった。筆者は、その小委員会の座長に任命された。そこで、青少年自身の声を反映させる必要を感じ、「放課後や休日の過ごし方についてのアンケート」を作成し、協議会事務局に調査票の配布・回収を依頼し、調査結果の分析を行った。

3．前野町第1回目調査の目的・実施方法

(1) 調査目的

子どもとその親たちを取り巻く環境は大きく変化し、そこから様々な問題が発生している。それらの諸問題に対処して、子育ちや子育ての環境を改善することは急務であるが、それを行政や専門家だけに任せてばかりではならない。つまり、市民自ら問題意識を持って学び、行動を起こしていかなければならない。

そこで、子育てに携わっている親、地域の子どもにかかわっている大人たちに、家庭や地域の子育てをめぐる環境や、日頃感じていることなどを聞き、今後の環境の改善や地域活動の方向性を考える材料を収集するため、アンケートを実施することにした。また、小学３年生から中学３年生に対しても、意見・要望を出してもらうため「小中学生アンケート」も併せて実施した。

(2) 調査対象

①前野出張所管内の小学３年生から中学３年生

②子育てをしていない方（現在中学生までの子どもを育てていない方）

③前野出張所管内の子育て中の方（現在、乳幼児から中学生までの子育てをしている方）

(3) 調査の設計

①調査地域

前野出張所管内。但し、「子育てをしていない方」アンケートは、板橋全域

②調査票の配票数

小中学生……約100票（内30票は少年野球チームの合宿で集合調査）

子育てをしていない方……約300票

子育て中の方……約200票

③被調査者の抽出

調査委員会の有意抽出（自分たちの普段かかわりのある人を選定するというもの）

④配票方式

小中学生……留置法（一部集合調査）

子育てをしていない方……留置法

子育て中の方……手渡し配布、回収は郵送

⑤調査時期

平成14年７月中旬から８月中旬

⑥回収数と回収率

３種合計　431票（回収率72％）

小中学生アンケート……85票（回収率85％）

子育てをしていない方アンケート……200票（回収率67％）

子育て中の方アンケート……146票（回収率73％）

⑦調査主体

「明日の板橋“まち”づくりの学び」調査実行委員会

淑徳短期大学塩野研究室

「板橋・ふれあい21」

コミュニティづくり研究会

3

4．前野町第1回目調査の集計結果

（1） 小中学生アンケートの集計結果

問1　回答者の年齢、男女別

小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
19.0	10.7	13.1	28.6	11.9	11.9	4.8

男	女
57.1	42.9

問2　地域の行事・活動の中で、あなたが参加したことのあるものを（全部）

第1位	お祭り	91.7％
第2位	ラジオ体操	79.8
第3位	盆踊り	78.6
第4位	スポーツ（野球、バレーボール、サッカーなど）	70.2
第5位	地域清掃	21.4
第6位	ボランティア活動	21.4
第7位	こども会	20.2

今の子どもたちの社会参加についてたずねた項目である。地域の伝統的な年中行事がすたれることなく、子どもたちの生活史に織り込まれていることがわかった。地域におけるボランティア体験の約20％という数字は、一般区民ボランティア活動に関する他の調査結果と類似した数字である。

問3　あなたは、住んでいるまちのどんなところが好きですか。（全部）

第1位	自分の家	77.4％
第2位	地域の行事（まつり、こども会、盆踊り、その他）	59.5
第3位	地域のスポーツクラブ（野球、サッカーなど）	47.6
第4位	公園	42.9
第5位	児童館	41.7
第6位	習っていること（ピアノ、水泳、たいこなど）	38.1
第7位	エコポリスセンター	36.9
第8位	親せきの家	35.7
第9位	図書館	31.0
第9位	ゲームセンター	31.0
第11位	スーパー	27.4

問３の設問は、地域内の生活の場（教育の場を除く）を列挙し、その中から好きな場所を選んでもらうというものである。当然自分の家を好きであると答える比率が第１位に来るであろうと予想し、その通り（77.4%で第１位）になったが、問題とすべきは、22.6%の子どもたちが自分の家を好きな場所として選ばなかったことであろう。

第２位は地域の伝統的な行事を選んでおり（59.5%）、町会の方々の苦労は報われていることになる。地域における「ともに生きる」人々のつきあい・交流というものの価値を体験できるそうした場・機会をもっと多くの子どもたちに与えたいという感想をもった。

第３位と第４位に戸外活動（スポーツと公園）の場が挙げられたのも健全な選択であり、尚一層、地域スポーツと公園の活用を推進することを期待したい。

また、４割強の子どもたちが「児童館」を好きな場所として選んでおり、その存在意識が確認された。「習い事」はかなりの子どもたちが経験していると思われるが、それを好きな場所として選んだのは、38.1%にすぎない。好きでやっている子もいるが、親に言われて仕方なくやっている子もいるという現状を表した数字である。

問４　あなたは、今まで自分のことでこまったことや相談したいことがあったとき、だれに話しましたか。

（全部）

第１位	両親	75.0％
第２位	友だち	61.9
第３位	学校の先生	28.6
第４位	塾の先生	9.5
第５位	祖父母	8.3
第６位	塾の友だち	4.8
第７位	その他	9.5

問４は、相談相手は誰かを調べるものである。結果は以上のようであったが、「両親」「友達」に次いで、「学校の先生」が第３位（28.6%）に来ているが、かなり低い数字を示していると言わざるを得ない。この表には表れていないが、選択肢のどれにも記入しなかった子ども（相談相手がいないのかもしれない子ども）は、５人（６％）であった。その５人の内訳は、小３が２名、小４が２名、中２が１名である。空所には、「自分で解決する」、「わからない」というコメントもあった。

問5　いま、あなたがほしいものはなんですか。（全部）

第1位	友達と遊ぶ時間	67.9％
第2位	休む時間	61.9
第3位	外の遊び場（公園、体育館のようなもの）	42.9
第4位	遊び友達	41.7
第5位	外の遊び場（地域の祭りのようなもの）	36.9
第6位	外の遊び場（児童館、図書館のようなもの）	29.8
第7位	家族で遊ぶ時間	25.0
第8位	学校で遊ぶこと	22.6
第9位	学校での勉強	4.8
第10位	塾での勉強	2.4
第11位	その他	6.0

問5は、子どもたちのニーズの実態を明らかにするもので、率直に「今ほしいもの」を選択してもらうことで、今不足しているものを知ることができる。第1に、友達と遊ぶ時間が不足しているのではないか、第2に休む時間が不足しているのではないかという課題を設定することができる。次いで、家の外の遊び場として、公園や体育館などの思いっきり身体を動かせる場所を求めていることがわかる。

反対に、欲しくないものは、「学校での勉強」「塾での勉強」であるが当然か。

問6　あなたは自信のあることをもっていますか。

ある	ない
62.2	37.8

問7　上の質問で「ある」と答えた方におたずねします。あなたが自信をもっていることは何ですか。

第1位	スポーツ（野球13、サッカー5、走る事7など）	40人
第2位	芸術系（ピアノ3、エレクトーン、絵、陶芸など）	6
第3位	勉強（国語、読書、理科、算数など）	5
第3位	友達ができること	5
第5位	ゲーム	4
第6位	遊び	3

問６及び問７は、今の子どもは、どのくらい自分に自信をもてているのか、さらに、自信をもっている子どもは、何によって自信を獲得したのかを調べるものである。

「自信のあることをもっている」子どもは62.2%だった。その自信獲得の要因は自由回答で答えてもらったが、ほとんどの回答者が記入してあった。その回答を分類すると圧倒的に「スポーツ」により自信を獲得していることがわかる（自信のある人の77%がスポーツに自信をもっている)。回答者の２～３割が野球チームに所属している子どもたちであり、そのために多少偏りが出ていると思われるが、それにしても、他を引き離しての第１位である。

問８　あなたは将来の夢をもっていますか。

ある	ない
64.6	35.4

問９　上の質問で「ある」と答えた方におたずねします。 あなたの将来の夢は何ですか。

第１位	野球選手	21人
第２位	サッカー選手	4
第３位	保育士	4
第３位	医師	4
第５位	美容師	3
第６位	秘密	3

問８及び問９は、今の子どもは、どのくらい将来の夢をもてているのか、さらに、夢をもっている子どもは、どんな夢をもっているのかを調べるものである。

「将来の夢をもっている」子どもは64.6%だった。その夢の内容は自由回答で答えてもらったが、ほとんどの回答者が記入してあった。その回答を分類すると「野球選手」になりたいが第１位で39%、他はどれも７%以下で、将来の夢は多方面に広がっていることがわかる。

7

（２）　まとめ

本稿のテーマに関係する小中学生調査のみここに掲載した。小中学生調査では、20～30票は少年野球チームの回答なので、項目によっては、かなりの偏りが出ている。

今回のテーマに関してまとめると、以下のように、「子どもが望む子育ち環境」というものが浮かび上がって来ると言えよう。

1. 物理的環境	・戸外の遊び場 ・自然 ・学校の開放	思い切り体を動かせる場所がほしい
2. 人間関係的環境	・友達と遊ぶ機会 ・地域の行事	家庭内人間関係は良好。 但し、22. 6%の子どもが、地域内の好きな場所として家庭を選ばなかった
3. 文化的環境	・ゆとり ・遊び時間	休む時間を求める子どもの心理を配慮したい。「これ以上勉強時間を増やさないでほしい」という訴えか。

5. 前野町第2回目調査の目的・実施方法

(1) 調査目的

現在子育てを行っている現役の父母の生の声を集め、そのことによって、どんな街づくりが求められているのかといった課題を明確にし、それを地域住民が共有することによって、「地域子育て支援ネットワークづくり」を目指すという目的を掲げた。

その目的達成のため、調査結果をもとに学習会を開催することを、調査時点において、被調査者に伝えた。

(2) 調査対象

前野出張所管内の18歳ぐらいまでの子どもを育てている保護者

(3) 調査の設計

①調査地域

前野出張所管内

②調査票の配票数

650票

③被調査者の抽出

調査委員会の有意抽出（自分たちの普段かかわりのある人を選定するというもの）

④配票方式

留置法（一部郵送による回収）

⑤調査時期

平成16年2月中旬から3月初旬

⑥回収数と回収率

449票（回収率69%）

⑦調査主体

「明日の板橋“まち”づくりの学び」調査実行委員会

淑徳短期大学塩野研究室

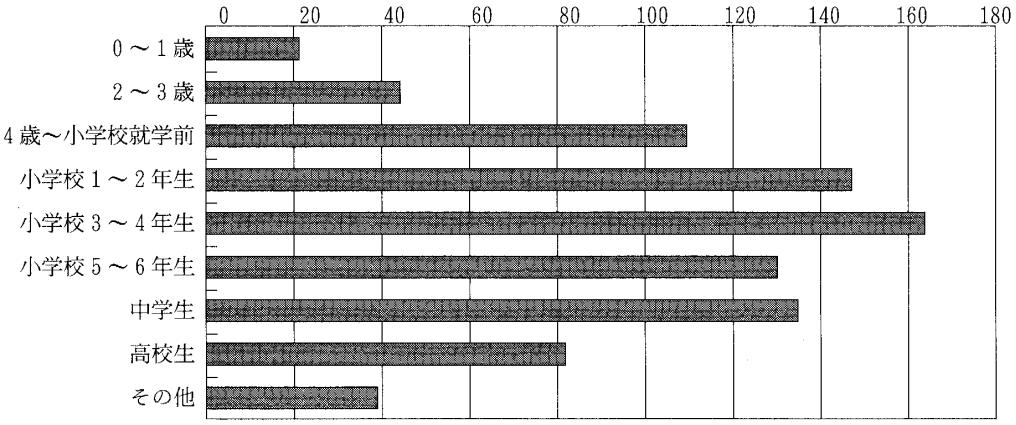
コミュニティづくり研究会

8

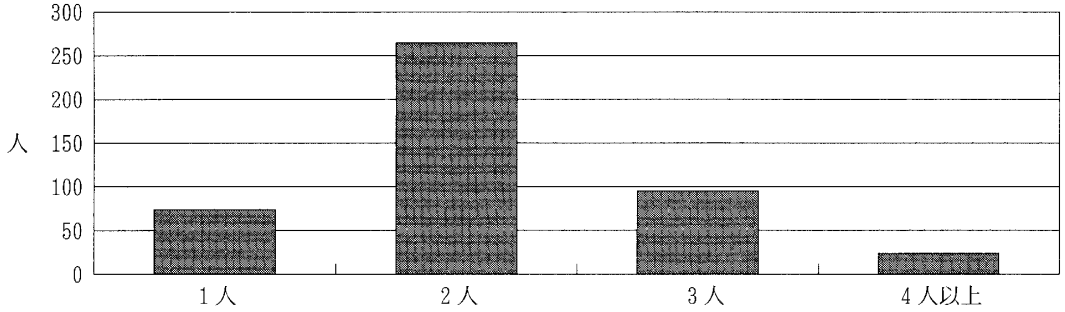
6．前野町第2回目調査の集計結果

（1） 調査対象となった子どもの概要

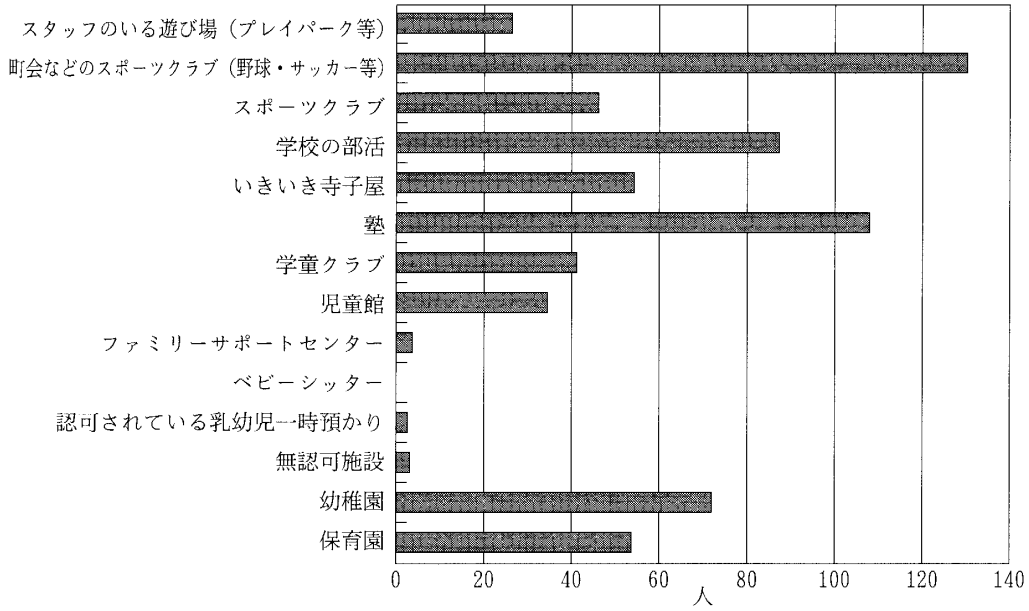
①子どもの年齢



②子どもの人数

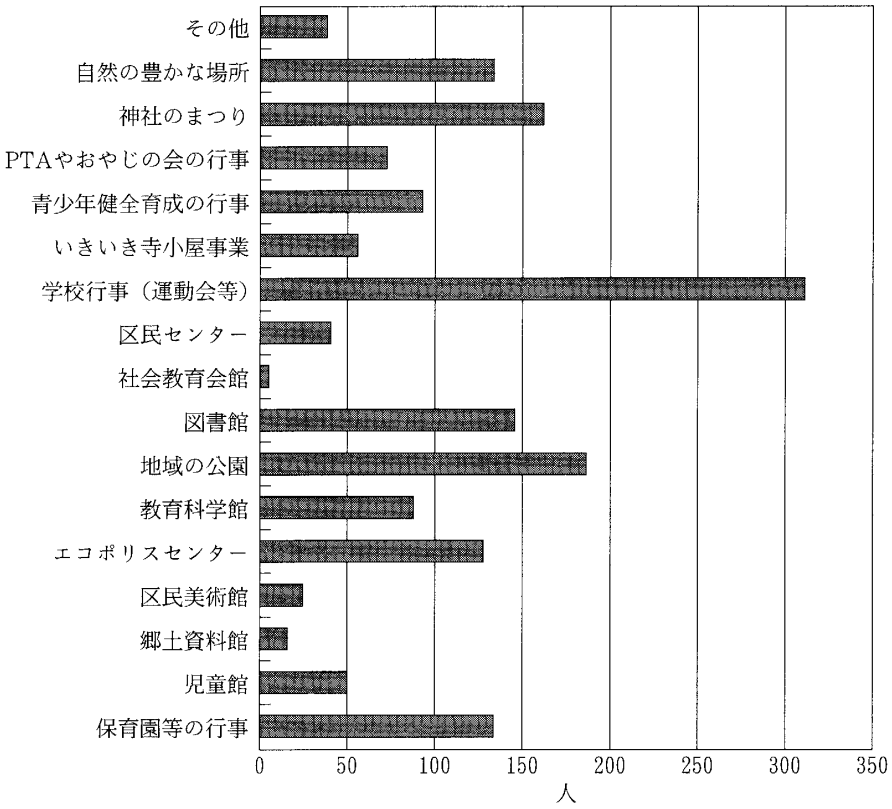


（2） 一定時間、子どもを預けている場所・機関



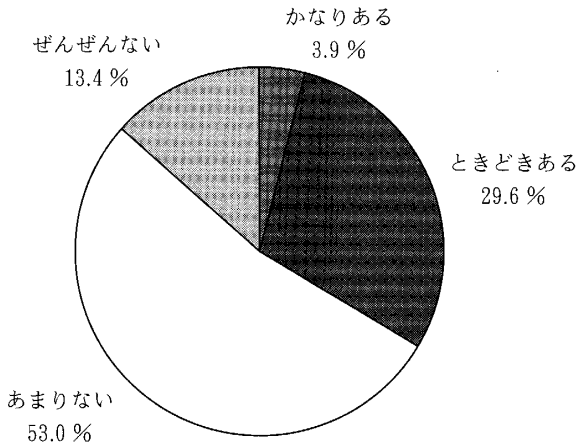
9

（3） 親子で行った地域行事・施設



（4） どう接してよいのかわからないこと

①どれぐらいあるか



10

②「どう接してよいのかわからないこと」の具体例は？（自由記述から引用）

問５の３さらに、「ａ．かなりある」「ｂ．ときどきある」と答えた方にたずねします。

「どう接してよいかわからないこと」について、具体的に例をあげてください。

いくつでもかまいません。**⇒この自由回答の中からいくつかを以下に書き抜く。**

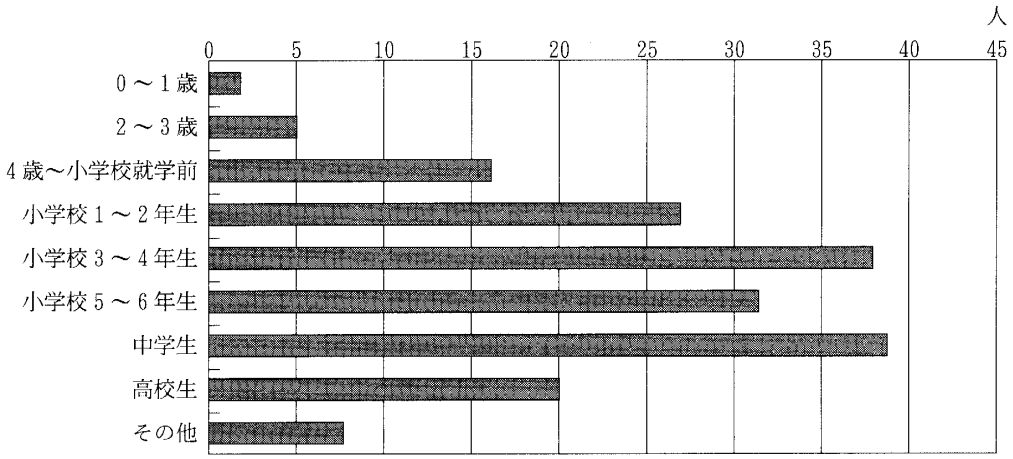
[親子のコミュニケーションについて]

- 1歳：泣いている時。本人の欲求がわからない時、どう接していいかわからなくなり、怒鳴ってしまいかえって大泣きさせてしまうことがある。泣き止んだ後、反省したりする。
- 5歳：細かいことを注意しているだけなのに、子どもが反省するより先に萎縮した表情を見せると、余計イライラしてくる。
- 7歳：買ってほしいものがある時、あるいは、やりたくないことに関して、自分の都合のいいウソをつく。
- 7歳：遊びに行く時、歩きたがらないので私がいつも抱っこかおんぶをします。（他の人だといやがるため）。その子は、危ないことをして注意されると不機嫌になる。
- 8歳と10歳(父子家庭)：叱る場合、父親として、そして、母親のようにと、使い分けをするようにしていますが、叱ったあとにかばってあげることがうまくできない（時間がたたないとそれができない）。なるべく抱きながら叱りたい。
- 9歳：子どもに注意する時、始めはなごやかにはなすのだが、こちらの言うことを聞こうとしないと、つい感情的になってしまう。
- 中学生：試験前などイライラしている時、親も静かにしていなければと少し気を使う。
- 高校生：スポーツで本人が悩んでいる時、親にはむずかしい専門用語をつかって話してくるので戸惑う。

[しつけについて]

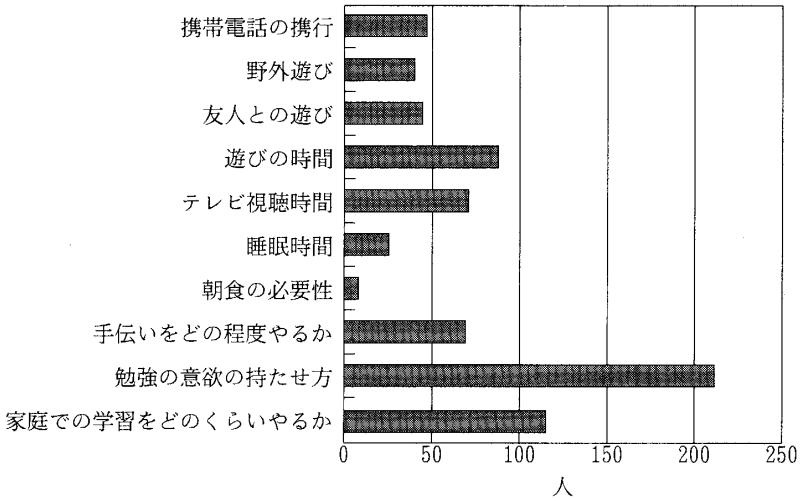
- 6歳：親が注意したり、怒ったりすると、すぐいじけてしまう。あるいは、物事の途中でいなくなってしまったり、他にあたったりする。
- 12歳：自分の意思を通そうとわがままな為、ここで負けてはいけないと思いながら甘やかしてしまう。
- 14歳：携帯電話をもちたい息子と持たせたくない両親とで、納得させられずどうしたものかと。

（5） 関係困難となった子の年齢

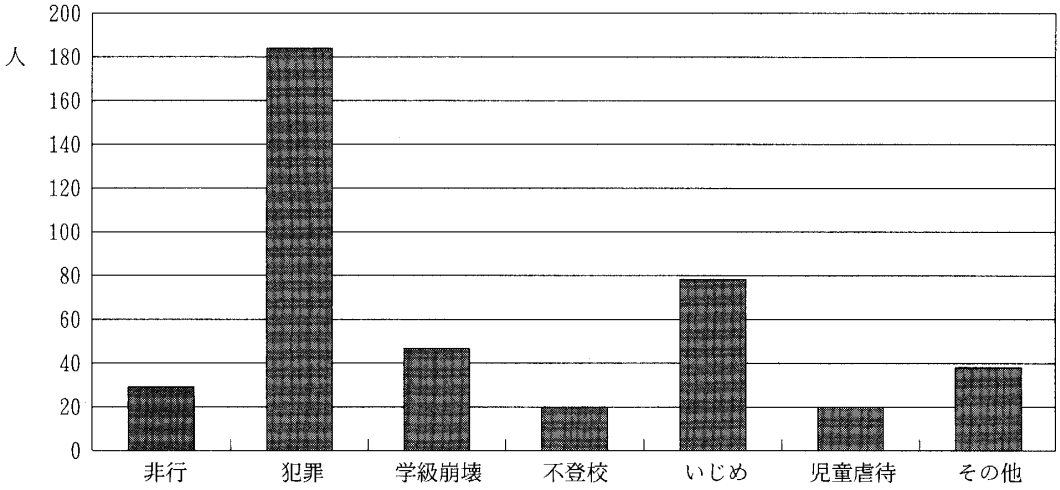


11

（6） 子育てで問題を感じていること



（7） その他の子育ての問題で差し迫ったこと



7．まとめ～自由記述を参考にして～

調査の自由記述の質問項目には、「どう接してよいかわからないことについて、具体的に例をあげてください」として、質的な回答を求める質問を定めた。90名の自由記述があり、それらを分析の対象とした。

数量的な集計結果とその自由記述により、現在子育てをしている方々が対策を求めている諸問題について、ある程度概要が見えてきた。以下にそれらを列挙する。

a．思春期で親と口をききたくない子どもと、どのようにコミュニケーションをとればよいのか。（構いながら、構いすぎないコミュニケーション上の工夫とは？）
b．子どもが思い通りに動いてくれないとき、親はどう感情処理すればよいのか？

c．親が子どもの未成熟を理解できない、思春期をよく理解できない、どう子どもに対処してよいか自信がないなどの問題に対する対策は？
d．親子間の傾聴はどのようにすれば成功するのか？
e．コミュニケーション豊かな親子関係はどのようにしたらつくりあげられるのか？
f．小さい時のコミュニケーション不足は、どうやり直しができるのか？
g．不登校の子どもに対して、どう対処すべきなのか？
h．いじめ等学校生活の不満など、誰が子どもの相談相手になれるのか？
i．帰宅時間その他、親子の考え方の相違をどう調整すべきか？
j．携帯電話やＥメールが子どもの行動を不透明にしているが、どのように対処すべきか？
k．昔と違い誘惑の多い今日、どのように勉強に気持ちを向けさせたらよいのか？
l．休日の過ごし方のわからない時、子どもだけでは危険と思われる時、公共の遊び場があれば！
m．おこずかいの渡し方や子どもの金銭感覚の違いで親が戸惑う時、どのように対処すべきか？
n．小学生の母親がいらいらして子どもにあたってしまうケースに、どう対処すべきなのか？
o．思春期以外の子どもでも、親の注意を素直に聞かないケースがふえているようだが、どう対処すべきなのか？

親たちは、自分の価値観と子どものそれとのズレに戸惑い、また、成長過程の子どもの自立心の尊重の仕方に迷い、さらに、親子間の会話が成り立ちづらいことに悩んでいるようである。

しかも、親は時として感情にとらわれ、子どもに暴力をふるわないまでも、イライラしてしまう様子がうかがえる。一方、子どもの方も切れやすかったり、我慢することができなかったりというケースが見られた。双方ともに、情緒の制御ができないが故の摩擦に苦しんでいる。

このような親たちに、あるいは子どもたちに相談相手がいるのであろうか。親たちが親として成長するための学習の場があるのだろうか。こうした地域資源の重要性は高いといわざるを得ない。

13

8．板橋区青少年問題協議会で実施した調査の概要

（1） 調査目的

諮問テーマ「子どもたちの主体的な地域参画の推進」に関する提言をするためには、地域の子どもたちの生活実態を把握する必要があり、『放課後や休日の過ごし方についてのアンケート』を実施することにより、地域参画のためのヒントをえることを目

的とする。[1)]

（2） 調査対象

板橋区青少年問題協議会小委員会委員の校長の属する下記の小・中・高校の各1校ずつで実施したものであり、全区を対象としたものではない。

板橋区立大谷口小学校 5，6年生　　各2クラス　117名
板橋区立赤塚第三中学校 1，2年生　各6クラス　396名
東京都立北野高等学校 1，2年生　　各2クラス　126名

（3） 調査時期

平成15年12月

9．板橋区青少年問題協議会で実施した調査の集計結果

（1） 中学生調査結果

1）平日の放課後の過ごし方について

中学生の放課後の過ごし方としては、「部活動」が第1位（62.2%）にきている。小学生では、「友達と遊ぶ」が第1位（67.5%）だったが、それは中学生では第2位（56.6%）であった。

小学生との比較で違いが顕著なのは、第4位の「メール・インターネット」（小学生の18.8%が中学生では47.0%）と、第8位の「習い事」（小学生49.6%が、中学生で22.8%）、である。

上位2項目は友と集うものであるが、それに匹敵するぐらい「テレビを見る」（54.3%）が第3位にきており、子どもたちのテレビ依存傾向は相変わらず強い。

また、意外だったのは「家族と過ごす」で、中学生（40.4%）は小学生（32.5%）に比して高かった。

「学習塾」に行く子どもは、小学生では32.5%だったものが、中学生では36.5%とわずかに高くなっている。

2）休日の過ごし方について

休日の過ごし方としては、「友達と遊ぶ」が第1位（63.7%）、「テレビを見る」が第2位（55.8%）で、第3位の「部活動」（45.4%）を上回った。とはいうものの、休日にも5割弱が部活動のため学校に行っていることになる。

「本を読む」（17.5%）は、小学生（24.8%）を下回った。「学習塾」も、11.4%で、小学生の15.4%を下回った。

「ボランティア活動」はわずか2.5%だった。

3）地域への関心について

地域のことを「全然考えない」人が、30.4%もいた。その理由は、「考えるきっかけがなかった」（45.8%）、「考える気持がなかった」（42.5%）が拮抗している。

逆に少しでも考える人は7割いたわけであるが、今後さらに地域のことを考える子

どもたちを増やすために、きっかけづくりに努めなければならない。

4）地域への関心について～具体的な関心～

地域のことを考えるといっても、それはどのようなことなのかをたずねてみると、「非行や犯罪」（47.8%）が断然の第1位だった。少年非行のピークが高原状態を保ち、また、少年が被害者となる犯罪も増加している今日、地域レベルでもかなり話題に上る実態があるということなのだろう。

「地域の行事」が第2位（29.2%）であるということは、中学生でも地域行事を楽しみにしている子どもたちがいることを示している。第3位から第5位までの諸問題については、学校で課題として取り上げていることの表れであろう。

5）地域について考えるきっかけについて

「家庭」（44.5%）の会話の中で、あるいは「学校の授業」（44.5%）の中で地域のことが考えられていることがわかる。だからこそ、考えるきっかけを失っている子やその意欲をもたない子が、そうした場において知識を持ち、関心を持つことができるような大人の配慮・工夫を期待したい。

6） 地域のことを考えない理由について

「考えるひまがなかった」は、わずか15%である。その答えをした子供たちは、部活動や勉強に励む中でひまを失っているのであろうから仕方のない数字であるとも考えられる。もちろん、「ゆとりの教育」を目指して完全週五日制に移行したのであるが、多忙を選択するのも子どもの主体的な意志であるかもしれない。

7）行事の認知について

地域事業を知らない子が、24.6%もいる。彼らに対してのPR方法の工夫や参加のきっかけづくりを今後考えていくべきであろう。

8）地域行事の情報入手経路について

地域事業のことは、友達との口コミが第1位（49.7%）で、ついで、「家族」から（47.0%）、「学校」（41.3%）と続いている。「町会掲示板」や「回覧板」を見ている子が四人に一人はいることがわかる。

9）地域行事への興味について

地域事業に対する興味については、「興味がある」（45.5%）は、「興味がない」（54.5%）を下回った。

10）地域行事の興味の対象について

地域事業の興味の対象は、「地区まつり」が、関心ある人の中で87.1%と断然1位である。選択肢に「いきいき寺子屋事業」を設けなかったのは残念であるが、子どもたちはそこにも祭り的な内容を期待しているのだろうか。

11）地域行事への参加経験について

地域事業への参加の有無であるが、「参加したことがない」は、37.6%である。この数字は、小学生（22.2%）に比して、かなり多いと言える。だんだん地域から離れていく傾向がみてとれる。

12）地域行事の参加の感想について

地域事業への参加の感想は、「楽しかった」と参加者の67.1%が答えているのに、「またやりたいと思った」が19.9%しかなかった。これは、「友達と遊んでいた方が楽しい」とか「家でテレビを見ていた方がよい」といった、子どもたちの冷めた感情のあらわれなのだろうか。

また、地域事業への参加形態が、まったく自発的なものなのか、周囲の大人に促されたものなのかによっても、その後の意欲に差が出るかもしれない。

13）地域行事に参加しない理由について

37.6%の参加しなかった子どもたちの、その理由は、「おもしろそうでないから」が50.7%と断然１位で、ついで「部活があるから」が24.3%だった。その他の理由としては、「誘われないから」、「塾があるから」が１割強あった。

14）クラブ活動入部状況について

クラブ活動をしている生徒は、81.7%だった。

15）クラブ活動の頻度について

部活動の活動状況は、週４日以上が全体の54.0%であり、約５割の生徒にとって、部活動は多忙を作り出す原因となっていることがわかる。

しかし、逆に考えれば、他の５割の生徒はまだ余力を残しているということである。

今回の調査結果から、懸念すべき点をふたつ挙げてみたい。

第一に、時間のすごし方に関して、複数回答でありながら「家族と過ごす」を選択しない子どもが59.9%（平日）、66.8%（休日）と数多くいたことである。保護者は、教育の場として学校や学習塾に頼り、部活動に多くの時間を任せているが、家庭においても、テレビ、テレビゲーム、インターネット等に子どもを預けてよしとしているのではあるまいか。

第二に、地域から遮断された子どもたちが一定数存在していることである。地域のことを「全然考えない」(30.4%) 子どもの存在、地域の事業を「知らない」(24.6%) 子どもの存在、さらに、「部活があるから」(9.1%)、「誘われないから」(5.1%)、「塾があるから」(4.6%)、という理由で地域事業に参加できない子どもの存在に表れている。参加して「楽しかった」体験をした子どもたちが39.4%、「充実感があった」という子どもたちが10.7%いたことを思うと、折角の地域体験の機会を奪われていることを残念に思う。

16

しかし、地域参画の基礎的な条件のひとつである、参画できる時間的なゆとりという点に関して、平日に関しては、学校教育の時間を用いて地域のことを考えさせてくれているし、休日において、５割以上の子どもたちは部活動に参加していないし、他のことにもさほど縛られていないようである。

保護者、教師、地域の諸機関が子どもたちのための地域参画のきっかけを作り出すことができれば、今まで以上に子どもたちは、その可能性をのばすと考えられる。

（2） 高校生調査

1）平日の放課後の過ごし方

中学生と比べて、部活動に拘束される率（32.5%）は低いし、学習塾はさらに低い（2.3%）。選択肢に「自宅学習」がないため、自由に時間をすごしている風に見える。

「家族と過ごす」は、24.6%であり、75.4%は家族と過ごす時間をもたないということである。

2）休日の過ごし方

休日は平日以上に「友達と遊ぶ」（78.6%）ゆとりを持っているようである。しかし、休日においても、「家族と過ごす」はわずか27.8%であった。

3）地域への関心について

地域のことを「全然考えない」は43.7%であり、中学生（30.4%）と比べてかなり高い数字を示している。

4）地域への関心について～具体的な関心～

地域のことの中で、「非行や犯罪」が第１位であるのは中学生と同じだが、比率はかなり下回っている。その代わり、地域の福祉・環境・外国人の問題に対する関心が中学生より高くなっている。

5）地域について考えるきっかけについて

どこで地域のことを考えたかということに関しても、比率は中学生とかなり違っている。「学校の授業」がかなり下回り、逆に「地域において」が高まっている。つまり、教師が意図的に考えさせている中学生と違い、自主的に課題意識を持っているかのようである。

しかし、上の問１の結果でわかったように、考える人の比率が下がっていることを考えると、もう少し、学校において意図的に考えさせることも必要なのではないだろうか。

6）地域のことを考えない理由について

「考える気持ちがなかった」が第１位となっている。これは、中学生に比較しても高いのだが、その理由は、最初の設問で明らかになったように友だちと遊んだり、テレビを見たりする余裕はかなりあるようなので、地域のことを考える価値を知らないからか、あるいは、大学受験等で時間的なゆとりはあっても精神的なゆとりがないことが原因であるとも考えられる。

17

7）地域行事の認知について

地域事業の認知度（62.7%）は、中学生（75.6%）に比して低くなっている。

8）地域行事の情報入手経路について

地域行事の周知に関して、学校（7.6%）の情報提供はなされているとは言いがたい。中学生の41.3%と比較すると顕著な違いである。

「町会掲示板」が39.2%の２位で「友達」（35.4%）以上であるし、中学生（27.2%）と比較しても高い。さらに、「回覧板」（34.2%）、「広報紙」（17.7%）も中学生を上回っていることを考えると、関心のある人は自分から地域の情報収集を行っていることがわかる。

9）地域行事への興味について

地域行事に対する興味度（37.3%）は決して高いとは言いがたい。中学生（45.5%）、小学生（62.4%）と比較すると、年齢が上がるにつれて、子どもは地域行事への関心を薄れさせる傾向があることがわかる。地区まつりや地区運動会を例示しているため、子供向けという意識が働くことも考えられる。

10）地域行事の興味の対象について

関心のある人の中で、「地区まつり」（85.1%）がもっとも興味あるものに選ばれた。「ボランティア」はそれに比べるとわずか19.1%だった。

11）地域行事への参加経験について

地域事業への参加度は、小学生（64.1%）、中学生（58.6%）、高校生（49.2%）と段々下がっている。

12）地域行事参加の感想について

地域事業に参加した人の反応としては、中学生と同じような傾向を示した。参加した人のうち、69.4%が「楽しかった」と答えている。

13）地域行事に参加しない理由について

参加しなかった理由は、「部活」と「塾」はわずかであり、「面白そうではない」（54.4%）

「誘われないから」（21.1%）という回答が多い。

14）クラブ活動入部状況について

クラブ（部活）の入部率は54.0%であり、中学生の81.7%と比してかなり少ない。中学の部活は全員入部の方針が多くあり、入部自由の高校との差がでるのは当然のことであろう。

15）クラブ活動の頻度について

週４回以上やっているのは全体の45.6%であり、中学（54.9%）と比較して、ゆるやかにやっている様子がうかがえる。

---

18 高校生は平日も休日も友達と遊んだり、テレビを見たり気ままに過ごしているようである。

一方、地域から意識が離れ、地域の中で楽しんだり、学んだり、ボランティアをするという動機が乏しいと言わざるを得ない。

ただ、一部の高校生は自主的に地域の情報を収集したり、地域の課題に関心をもったり、ボランティア活動に興味を抱いたりしている。この姿は、知識を多く蓄え、しかも社会性の伸長する発達段階を考えると望ましい姿である。

（3） まとめ

ここでは、今回実施した調査をもとにして、子どもたちと地域との結びつきについてまとめる。

まず、その多忙さについて。小学生は、塾や習い事によって、中学生は、部活や塾などによって、週に5日以上通うという子どもも何割かいることがわかった。しかし、すべての子どもがそうであるわけではなく、余裕を残した子どもたちは、友達と遊んだり、テレビを見たりして時間を過ごしている。そうした時間に地域行事に参加した子どもたちは、かなりの割合で、楽しかったとか充実感があったなどと答えている。参加できなかった子どもたちに聞くと、その参加しなかった理由は、知らなかった、きっかけがなかったという答えが返ってきた。私たちは、今後、彼らに対して、そうした地域参画の機会の創出と情報伝達に努めなければならない。

次に、年齢が高くなるにつれて、地域に関する意識が薄くなる実態について。本来、小学生、中学生、高校生と成長するに従って地域に関心を持ち、地域の課題解決の役割を担うという市民性の獲得を期待するわけであるが、逆の実態があることが明らかとなった。このことは、「子どもたちの主体的な地域参画の推進」にとって、最大の壁としてたちふさがることになるだろう。

10. 地域の子育て・子育ち支援への提言

（1） 子どもの主体性の尊重

今回の提言は、大人たちが子どもたちの健全育成のための仕組みをつくりあげることでもある。その仕組みに乗せられた子どもたちの参画は、その上に留まっている限り、仕組みが無くなった時に、雲散霧消してしまうことだろう。すなわち、子どもたちがその仕組みの上にいる間に「真の主体性」を培い、いつか大人が用意した仕組みから脱却し、自ら社会参加の仕組みを作り出すことが必要である。

つまり、提言に盛り込まれた内容を実践する際の第一の留意点は、それらはあくまでも子どもたちの地域参画を促すための一時的なお膳立てであることの自覚である。次に、子どもたちが「真の主体性」を身に付けるための階段をどのように上っていくのかについての見守りと、それを支える専門的な知見を積み上げていくことが望まれる。

19

（2） 子どもたちが「地域参画のはしご」を上る以前の条件 ～家庭のあり方～

地域参画に関しては、当然保護者が子どものモデルとなることが期待されるが、その保護者の地域参画を今まで以上に促進すべきであることは言うまでもない。

しかし、モデルとなるべき保護者の「親としての自覚」が不足している、あるいは「親が子どもと向き合う自信をなくしている」等の声が数多く出された。まず、この状態を改善しなければ、「地域参画のはしご」を上る前に子どもたちがつまづいてしま

うことになりかねない。この、「家庭教育のあり方」、「親子関係の改善」等の重要さについては、その意義を前野町における２回にわたる調査で確認したところである。

（３） 学校における条件整備 ～「総合的な学習の時間」のあり方～

学校における地域参画のきっかけを与えるものとして、「総合的な学習の時間」が期待されている。しかし、「生きる力」の育成をめざすこの新しい時間については、一方で学力の低下に結びつけて異論が出されることもあり、かなりの制約の下に置かれている状況がある。

すなわち、今後、「総合的な学習の時間」が子どもたちの主体的な地域参画を促すものとしての価値を有し、それが子どもたちの「生きる力」を高め、ひいては、地域の活力を向上させるものとなることが教育実践の中で検証される必要がある。

（４） 地域における条件整備

①子どもたちの地域参画のための関係者・関係機関（青少年委員会、町会・自治会、学校、PTA、児童館、社会教育施設等）の地域をベースにした連携・ネットワークづくりが現在以上に作り上げられることが望ましい。なぜなら、地域によっては、青少年委員の認知が不足していたり、一機関に過度の期待がかかったり、互いの状況の理解が不足していたりなど、意識の共有が図られているとは言い難い実態があるようである。

②新しい住民と古い住民の融和がないと、保護者にとっても子どもにとっても、地域における孤立状況を生み出してしまう。すなわち、ともにまちづくりを進める意識を醸成するために、新住民の声を聴く場を設けることを提言する。

③子どもの居場所を拡大する

子どもは、さまざまな潜在的な機能・能力を内に秘めているが、空間的にも時間的にも制約を受けており、存分にそれらを発揮できないでいる。思い切り体を動かす場所、音楽バンドをやる場所、その他、もしやる機会があれば才能が開花したかもしれない数々の趣味活動等が行える「居場所」を潜在的には多くの子どもたちが求めているはずである。

また、孤立しがちな社会関係に囲まれた現状において、遊びの場で共同関係を再構築することは、競争社会に投げ込まれる前の少年期に共生の感覚を育くむ良い機会であるということができる。

区内の社会教育会館、児童館、あるいは、区民センターが既存施設として活用できるだろうし、提言にあるように、空き店舗あるいは空き教室の新規活用法としても検討されるべきであろう。

20

（５） 小地域レベル（中学校区、出張所管内）における子どもと大人の対話集会を試みる

前野出張所管内では、平成13年11月から年２回以上「対話の集い」を開いている。主催者は、『まえのの広場』実行委員会であるが、スタッフの内訳は管内小学校のPTA、保護司、町会関係者、民生児童委員、大学教員（チューター役）などであり、

参加者は、地元の児童・生徒・学生、からお年寄りまで全ての年齢層に呼びかけ、管内公立学校の校長、青少年委員、ジュニアリーダーも積極的に参加している。

この市民活動の趣旨は、「まちづくりの原点は対話である」と対話の必要性を重視し、その継続的な実施によって、地域の連帯・和の充実を実現している。毎回100名内外の参加者を得て、平成15年11月の第７回目は、地元の和太鼓の会やジュニアリーダーから中学生・高校生・大学生を参画させ、また地元の淑徳短大から短大生を参画させて、大人たちの前でディベートを行なった。

毎回、対話のためのプログラムに工夫がこらされており、第６回目は、「葉っぱのフレディ」を上映してからの対話集会だった。そこでは、中学生から大学生にいたるジュニアリーダーが小グループの司会と記録係を勤めた。

この事例は、小地域の大人たちが、地元の子どもたちが大人たちに向けて表現する場を自主的に創造しているという点でユニークであり、しかも、成功を収めているということから他地域にこれをモデルとして普及させることを提案する。

11. おわりに

子育ては、いつの時代も初めての経験として親を困らせるものであろうが、ただその大変さには、時代による違いがあるに違いない。また、今日ほど、家庭の機能が外部化することはなかったし、児童虐待・ＤＶの増加にみられる家族関係の欠陥の広がりも稀有のことであろう。

つまり、子育てや青少年健全育成にかかわる今日の課題は、決して行政任せですませることのできる容易なものではなく、住民が主体的に地域参画して公私協働で課題すべきものと認識されなければならない。しかし、期待される地域共同体も危うい状態にあるとすると、地域の再建と子育て支援は同時に進める必要があるわけである。たとえば、青少年自身が地域参画することができれば、子どもと大人の協働による社会づくりが実現する。そこに参画する大人たちは、家庭の教育力を補い、逆に子どもは地域の支え手に育っていく。

青少年の社会参画は、大人たちに要望をつきつけ、新しい文化を築くかもしれない。子どもの有する豊かさを、家庭の中に押しとどめるのでなく、地域の中で発揮させ伸ばしていかなければならない。もはや、家庭の問題は地域全体の問題として、開かれた支援網、つまり子育て支援ネットワークをつくりだして、その中で解決する方向を目指さなければならない。

21

注

1）平成15年度板橋区青少年問題協議会答申『子どもたちの主体的な地域参画の推進平成16年２月』板橋区児童女性部女性青少年課，2004，p.4－5.